

# 愉しむ

幼少の頃、私はこの号で紹介されているマウスと同じことを経験した。当時、地方の家庭では、チーズはまだ馴染みのある食べ物ではなかったと思う。大手乳業メーカーの扇形のチーズを叔母に手渡されて初めて口にしたとき、その匂いと食感の異常に衝撃を受けた。その後しばらくは決してチーズに手をのばすことはなかった。ところが、当時放映されていた「トムとジェリー」に触発されて、もう一度体験してみたいという思いに駆られ、恐る恐る食べてみた。あー不思議。これがウマイ。その後チーズは私の好物となり、飲食店でもチーズを注文することが多い。強烈な匂いのウォッシュタイプが好みである。

かすかな匂いから、過去に経験したさまざまな情景を突如として思い出すことがある。そのときの部屋の様子や街並みなど、光の加減や色などとともに意外なほどはっきりとイメージできる。匂いの記憶が景観や感情とむすびついて、しっかりと脳の中に染みついているのだと思知らされる。

匂いや味、景観など私たちが五感で得た刺激は、感情と複雑に絡み合いながら記憶され、私たちの心を豊かにしてくれる。私たちが研究の対象としている食料や環境は、人間の心にも深く関わりながらやがて愉しみをかたちづくる。



東京大学大学院農学生命科学研究科長・農学部長  
堤 伸浩

気候変動と自然災害との関係が指摘され、生物多様性の重要性とその価値が認識、共有されている現代社会においては、環境保全がなぜ必要かという問いはもはや意味を持たない。その一方で、環境の一側面とも言える景観については、“なぜ景観をまもる必要があるのか?”という問いが成立する。



農学生命科学研究科 森林科学専攻  
森林風致計画学研究室  
やまもと きよたつ  
山本清龍 准教授

# なぜ景観をまもるのか

～景観に対する問いと向き合う～

都市を例にとると近代は新陳代謝の繰り返しである。常に再開発事業や駅の改良工事などが行われ、完成された同じ姿の都市をみることは叶わない。東大キャンパスもしかりであり、管見の限り、この約四半世紀は整備、改修、新築の工事の連続である。それゆえ、景観が変化し続けるという前提を許容しつつ景観をまもることを論じなければならず、このあたりが難しい。

近代に入ると景観要素となる個々の素材の強度が向上し、かつてなかった高層建築の出現など形態、色彩の多様化が進展する。さらに、情報、物質、技術の流動化、広域化も手伝って、私たちは優れた、あるいは費用対効果の高い素材、工法を選択できるようになった。こうして、異なる個性を持っていたはずの場所で同じモノが見られるようになり、全体として均質化がもたらされた。

近年は、自然エネルギーへの回帰と並行して巨大な風車が立ち並ぶ海、山を目にするようになり、新しい景観が立ち現れるようになった。ヒューマンスケールを超えた景観、自然との調和が欠如した景観などと批判を加えることも可能であるが、見方を変えれば新しい景観、風

リユージュのまちなみにある種の感動を覚えるのはそうした無意識の集合による秩序にある。

近世以前は自然への畏敬、伝統的慣習によって無意識に秩序をとまなげて景観が形成された時代がある。瓦、板、茅で葺かれる屋根、石、土、泥で築かれる壁、塀など、一定範囲の地域で同じ素材が用いられ、おのずと個々の景観要素の類似性は高まり、地域として統一された景観パターンが形成されたのである。黒石市中町の商家町、沖縄県竹富島の赤瓦の集落、同じ色の屋根が美しく並ぶベルギーのブ

リユージュのまちなみにある種の感動を覚えるのはそうした無意識の集合による秩序にある。

景の獲得でもあり、いずれ日本らしい景観として評価され定着するかもしれない。

歴史的に見れば、景観、風景の喪失と獲得はこれまでずっと行ってきた私たち人間の営為でもあり、それゆえに、なぜ景観をまもる必要があるのかという問いに答えを見出すのは難しいのである。解答するためのキーワードには、郷愁、地域への愛着、帰属意識などがあるが、これからも社会的な価値意識を参照しつつ論じ考察していく必要がある。



新陳代謝する都市景観  
神田川、聖橋、お茶の水橋、茗溪通りに囲まれたJR御茶ノ水駅はその地形的条件の不利によりリニアフリーの整備が遅れていたことから駅前広場の整備とあわせて全面的に造り替えられようとしている。

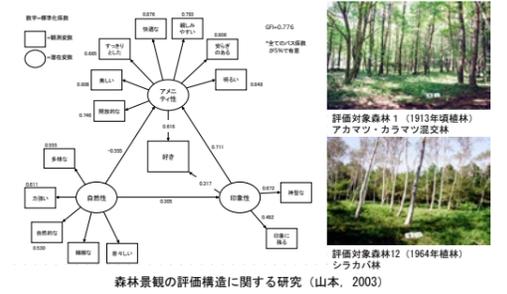
## 教えて! Q&A

### ■「景観と風景」

景観は人間をとりまく環境のながめであり、視覚的特性を指す用語である。風景が美醜や快・不快など人間の文化的要素を含めた総合的主観的概念であるのに対し、景観は客観的分析的概念であるが、今日では景観の概念が拡大し広い意味で使用されている。たとえば、他の言葉との組み合わせとして景観解析がある一方で風景解析の呼称は見あたらず、専門用語としては使い分けられている。しかし、日常的には使い分けはなされておらず、どちらの語を用いてもよい場合が多い。

### ■「景観の評価」

景観はきわめて主観的な概念であるが、景観に対する人の評価にある程度の傾向を読み取ることができる。東京大学と東邦大学の学生68人に行った16の森林景観の評価実験の結果から、人は自然性や印象性によってではなくアメニティ性(快適性)によって森林景観の好ましさを評価していることが分かる。人に好まれる森林景観を整備するためには地面の雑草を刈り払い、枝打ちと間伐を行うことで見通しの良さや明るさを確保することが重要である。



### ■「景観をまもる手法としてのゾーニング」

都市の景観だけでなく、国立公園等の自然風景地の代表的な管理手法にゾーニングがある。ゾーニングとは公園計画や都市計画、建築計画等において、一つの空間全体を機能、用途、法的規制などを指標としていくつかの小部分に分ける作業または過程を言う。とくに、風景計画では、対象地域をその景観特性を表す指標によって小地区に区分することを指す。たとえば富士山では、ゾーニングによっておよそ五合目以上が特別保護地区に指定されており、風景の保護を図るため厳しい規制が行われている。



富士山吉田口五合目(富士山で登山の起点となるのが五合目である。富士山信仰ではおよそ五合目以上は聖域とされ、自然公園法の下では特別保護地区に指定されている。近年の課題として富士山保全協力金の徴収率の伸び悩みなどがある。)

詳しくはこちら、<https://www.fuuchi.fr.a.u-tokyo.ac.jp>

富山県砺波平野の散居村景観  
富山県の砺波平野の散居村住居を取り囲み、防風、防雪の機能を持つ屋敷林は失われつつある。窓やサッシの性能の向上により、屋敷林が果たす役割への期待が相対的に低下し、2004年の台風被害を契機に屋敷林景観が急激に変容している。